

# 青年海外協力隊帰国後進路状況

## ・社会還元活動調査

2012年3月29日

監修：佐藤 真久（東京都市大学）

独立行政法人 国際協力機構 青年海外協力隊事務局

## はじめに

本調査は、「青年海外協力隊帰国後進路状況・社会還元活動調査」と題して、平成 13 年度の派遣隊員 325 名を対象に帰国後の OB・OG の進路状況、社会還元・社会貢献活動の実態調査を行ったものである。将来的には、本調査を基礎として、今後の進路支援、社会還元・貢献活動の促進、OB・OG 間のネットワーク作りを促進することを目的としている。

本調査から、大多数の協力隊隊員が協力隊経験により成長を感じていたことが読み取れる。とりわけ、柔軟性・異文化理解・語学力・コミュニケーション能力などにおいて成長を感じており、8 割を超える協力隊隊員が「協力隊経験が帰国後の仕事や日常生活に役立っている」と感じていることが明らかになった。体験談発表を通じた国際理解教育、地域社会での自治会活動、子育て支援、福祉・慈善活動、環境保護への積極的な関与、継続した国際協力活動など、協力隊経験は社会還元・貢献活動に積極的に活用されていることが読み取れる。

平成 21 年度に筆者が研究代表をした「青年海外協力隊現職教員特別参加制度による派遣教員の社会貢献と組織的支援・活用の可能性」<sup>1</sup>からも、派遣教員が途上国における海外教育経験を通じて、適応力・忍耐力・課題解決能力・異文化コミュニケーション力・危機管理能力・自己表現力など、さまざまな側面での人間的な成長を遂げ、豊かな資質・能力を携えて教育現場で活躍している姿が見えてきた。

このように、途上国における協力隊の学びと経験は、隊員自身の資質能力の向上に大きな影響を与えているだけでなく、グローバルな文脈とローカルな文脈をつなぐ社会還元・貢献活動に積極的に活用されている。これらを踏まえると、青年海外協力隊事業は、今日、国連プログラムとして展開されている「持続可能な開発のための教育（ESD）の国連 10 年（2004-2015）」での指摘、「個人と社会の変容を促す学び（Learning to transform oneself and society）」の場としての一翼を担っていると言えよう。

日本が取り組む青年海外協力隊事業による国際協力が海外体験や技術協力の範疇を超えて、海外経験から学び、国内外の社会において関わる人たちと相互に活かしあう（還元・貢献）ことによって、環境問題に代表されるような世界的で複雑な問題群（Global Problematique）に対する人材の育成（人間開発アプローチ）に資すると筆者は考えている。さらに言えば、ミレニアム開発目標（MDGs）と整合性のとれた「持続可能な開発のための教育（ESD）」の取組を可能にするのだと確信する次第である。

佐藤真久

東京都市大学 環境情報学部

2012 年 3 月 29 日

<sup>1</sup> 佐藤真久(2010)、「青年海外協力隊現職教員特別参加制度による派遣教員の社会貢献と組織的支援・活用の可能性」、文部科学省平成 21 年度国際開発協力サポートセンター・プロジェクト

## 調査概要

### 1.本調査の実施概要

- 【名称】 ● 青年海外協力隊帰国後進路状況・社会還元活動調査
- 【目的】 ● 帰国後のOB・OGの進路状況、社会還元・社会貢献活動の実態調査を行うことで、今後の進路支援、社会還元活動の促進、OB・OG間のネットワーク作りを促進することを目的とする。
- 【調査期間】 ● 2011年11月1日～12月31日（電話調査：2011年11月1日～11月14日）
- 【調査方法】 ● アンケート調査（様式別紙）  
● 主に電話での聞き取り調査による。事情に応じてメール、FAX対応を行う。
- 【実施者】 ● 公益社団法人 青年海外協力協会（委託）
- 【調査対象】 ● 平成13年度派遣隊員 768名（935名のうち物故隊員・任期短縮・連絡不要希望者167名を除く）
- 【調査内容】 ● 帰国隊員の進路状況（現在の職業・雇用形態・勤務先・役職等）  
● 青年海外協力隊参加により伸びた能力、経験が役立った具体例等  
● 帰国隊員の社会還元・社会貢献の動向や具体的な活動事例  
● 今後取り組みたい活動と、期待するサポート
- 【分析方法】 ● 頻度集計、クラスター分析

### 2.本調査の有効性（Validity）

本調査は、電話による聞き取り調査を主体とした為、調査者と対象者との対話が可能となり、協力隊経験が役立っているエピソード、今後取り組みたい活動では200件以上の、多様な情報収集が可能となった。また、連絡を取ることが出来た400名からは81%（325人）という高い回答率を得ることが出来た。

### 3.本調査の制限（Limitation）

今般の調査は、協力隊参加後10年が経過する、平成13年度派遣の935名の内、768名が対象であった（物故隊員・任期短縮・連絡不要希望者を除く）。768名の内325人（42%）という回答率の要因として、帰国隊員の連絡先が、物理的に入手困難であったことが考えられる。今般は、より詳細な情報を取得するため聞き取り調査を主体としたが、768名の内48%は電話連絡が不可能な状態であった。（内訳：「登録した電話番号が既に使われていない（9%）」。「留守宅より引越をしているが、新しい連絡先を教えて頂けない（20%）」。「聞き取り調査中に常に留守だった（19%）」。

こうした状況を回避するためには、今後帰国隊員に対して、定期的な情報発信、経験者のネットワークを活用するための人材バンクが必要である。また、回答者325人は、基本的に青年海外協力隊事業に対し好意を持っている比率が高いことが予想され、本調査結果データは、ある程度前向きな評価をしている可能性がある。

#### 4.本調査で採用した調査枠組み（アンケート概要）

表 1:本調査で採用した調査枠組み

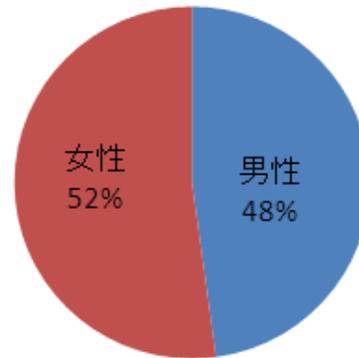
- Q1. 氏名  
Q2. 年齢  
Q3. 性別  
Q4. 派遣国  
Q5. 隊次  
Q6. 職種  
Q7. 現職参加（選択制）  
Q8. 現職参加の場合、派遣時所属先  
Q9. 現住所  
Q10.電話番号  
Q11.メールアドレス  
Q12.現在の職業（選択制）  
Q13.雇用形態（選択制）  
Q14.勤務先名称  
Q15.役職  
Q16.協力隊参加経験で得た能力・意識についてお答えください。  
(1) 協力隊参加により成長した・能力が伸びたと感じる。（選択制）  
(2) 協力隊参加により成長した能力をお選びください。（選択制、3つまで）  
(3) 上記で伸びたと感じる能力や協力隊経験は、現在の「仕事」において役立っていると思いますか。（選択制）  
(4) 上記で伸びたと感じる能力や協力隊経験は、現在の「日常生活」において役立っていると思いますか。（選択制）  
(5) 協力隊経験が役立っている具体的なエピソードをお書きください。  
Q17.帰国後、実際に隊員経験を活かして行っていることについてお答えください。（複数回答可・現在過去問わず）  
(1) 地域社会において  
・自治会活動、子育て支援、福祉活動、慈善活動、環境保護などに参加している。  
・地域・村おこし（観光、産業等）の活動に参加している。  
・子どもや青少年のキャンプ、レクリエーション、自然学校など野外教育活動に参加している。  
・その他  
(2) 国際交流・異文化理解  
・協力隊体験談を話している。  
・地元や近隣地域でおこなわれる交流イベントや催し物等に参加している。  
・在住外国人に対する通訳、語学指導、生活相談支援などを行っている。  
・任国での活動を通じて知り合った人達と今でも連絡をとることがある。  
・任国で身に付けた現地の生活習慣・文化（芸能、手工芸等）を帰国後も続けている。  
・インターネット(Facebook やチャットなど)を通して、新たに外国人との交友関係を広めている。  
・その他  
(3) 国際協力  
・NGO、NPO、国際協力機関、開発コンサルタントなどに仕事や会員として携わっている。  
・個人単位で任国またはそれ以外の途上国への支援活動を行っている。  
・その他  
(4) 自己研摩、キャリアアップにおいて  
・任国の言語や外国語の学習を続け仕事や生活の場で活用している。  
・任国での活動がきっかけで派遣職種の専門性を現在の職業に活かしている。  
・任国での活動がきっかけで派遣職種以外の分野で専門性を身につけて、現在の職業に活かしている。  
・その他  
(5) 上記以外のその他、活動している地域  
Q18.今後協力隊経験を活かして取り組みたい活動についてお答えください  
(1) 取り組みたい活動  
(2) どのようなサポートがあれば活動しやすいですか。

## 5.調査結果

### 5-1.本調査における回収状況と回答属性

表 2: 回収結果の詳細

	詳細	人数	%
①	回答者	325	42%
②	未回答	75	10%
③	電話番号解約済み	68	9%
④	留守宅から引っ越し	157	20%
⑤	不通	143	19%
⑥	合計	768	100%



#### 【回答者の詳細】 325 人

男性：155 人（48%）、女性 158 人（52%）

平均年齢：37.6 歳

図 1: 回収結果(男女比率)

#### 【回答者の派遣職種別分布(表 2)】

上位 10 位までは表 3 参照。

10 位以下は、栄養士（8 名）。音楽・家畜飼育・自動車整備・青少年活動（7 名）。家政・植林・婦人子供服（6 名）。果樹・建築（5 名）。環境教育・助産師・幼稚園教諭（4 名）。手工芸・体操競技・土木施工・統計・保育士・野球（3 名）。サッカー・ソーシャルワーカー・デザイン・稲作・感染症対策・観光業・考古学・視聴覚教育・数学教師・電気機器・都市計画・土壌肥料・陶磁器・農業土木・美容師・溶接・理学療法士（2 名）。エアロビクス・バスケットボール・バドミントン・バレーボール・ハンドボール・テニス・ポリオ対策・医療機器・気象学・漁業協同組合・建設機械・工作機械・鋁業・作業療法士・司書・市場調査・歯科衛生士・自動車板金・写真・珠算・柔道・獣医師・重量あげ・植物学・診療放射線技師・水泳・水産物加工・生態調査・染色・卓球・地盤調査・電気設備・電気機器・土木・農業機械・農業協同組合・皮革工芸・放送・薬剤師・養殖・料理（1 名）

表 3: 回答者の派遣職種別分布

1	理数科教師	31
2	日本語教師	25
3	コンピュータ技術	20
4	野菜	19
5	体育	12
6	小学校教諭	11
7	看護師	10
8	養護	10
9	村落開発普及員	9
9	保健師	9

#### 【派遣国別回答者数】

上位 10 位までは、表 4 参照。

10 位以下は、エルサルバドル・タイ・ブータン・ボリビア・モンゴル（8 名）。フィジー・マラウイ・メキシコ・（7 名）。エクアドル・カンボジア・セネガル・ニカラグア・ニジェール・モロッコ（6 名）。コスタリカ・ドミニカ共和国・ネパール（5 名）。エジプト・ジャマイカ・スリランカ・チリ・トンガ・パナマ・パラオ・ブルキナファソ・ベトナム・

表 4: 回答者の派遣国別分布

1	中華人民共和国	15
2	バングラデシュ	14
3	ホンジュラス	13
4	インドネシア	12
5	ザンビア	12
6	タンザニア	12
7	パラグアイ	11
8	ガーナ	10
9	グアテマラ	9
9	ブルガリア	9

マレーシア・ミクロネシア・ヨルダン・ラオス（4名）。

ウガンダ・コロンビア・サモア・シリア・ジンバブエ・

バヌアツ・パプアニューギニア・ハンガリー・フィリピン・ルーマニア（3名）。ウズベキスタン・エチオピア・ケニア・ポーランド・ボツワナ・モルディブ（2名）。セントルシア・マーシャル（1名）

## 5-2.本調査結果

### (1) 帰国後の進路状況：「帰国後の進路は民間企業・地方公務員（教員職）が人気」

Q12「現在の職業」について全体の24%が「民間企業」と回答し、「地方公務員教員職」15%と続いた。地方公務員（教員職）や公益法人が通常の産業分類別有業者の割合より多い（参考：平成19年就業構造基本調査・統計局）ことから、青年海外協力隊経験を活かし、その経験を伝えていきたいと考えている人が多いことが読み取ることができる。「自営」には起業・農業・陶芸。「その他」には、農業・組合・専門職や青年海外協力隊として再度派遣中が挙げられた。尚、「無職」45人（14%）は専業主婦が大多数を占める（表5、図2）。

表5:回答者の現在の職業

	職業	人数	%
1	民間企業	80	24%
2	地方公務員(教員職)	48	14%
3	地方公務員(一般職)	25	8%
4	自営	22	7%
5	独立行政法人・公益法人	21	6%
6	医療機関	14	4%
7	学校法人(高等)	12	4%
8	学生	8	3%
9	社団法人	8	2%
10	NGO・NPO	7	2%
11	財団法人	5	2%
12	国家公務員	3	1%
13	学校法人(初等・中等)	3	1%
14	議員	1	0%
15	弁護士	0	0%
16	無職	45	15%
17	その他	19	6%
18	未記入	4	1%
	合計	325	100%

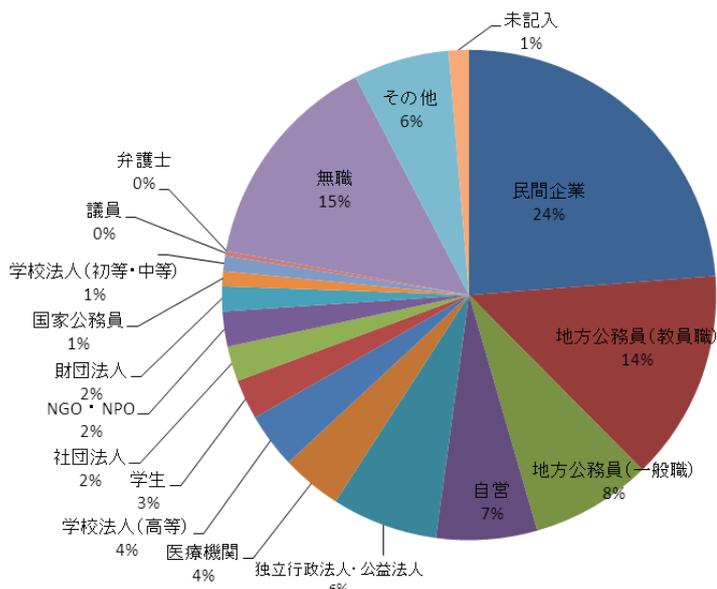


図2:回答者の現在の職業(職業別比率)

**(2) 雇用形態：「雇用形態の70%が正職員・正社員」**

Q13「雇用形態」の問いに対する回答者は、Q12で無職・学生と答えた人以外の272人であり、内訳は「正職員・正社員」189人（70%）、「契約職員・契約社員」36人（13%）、「派遣職員・派遣社員」1人（1%未満）、「アルバイト・パート」10人（4%）、「未記入」36人（13%）であった。「契約職員・契約社員」の方では、10名の方がJICA 専門家、企画調査員、国際協力推進員として働いているとの回答があり、国際協力事業への強い関心がうかがえる（表6、図3）。

表6:回答者の雇用形態

	内訳	人数	%
1	正職員・正社員	189	70%
2	契約職員・契約社員	36	13%
3	派遣職員・派遣社員	1	0%
4	アルバイト・パート	10	4%
5	未記入	36	13%
	合計	272	100%

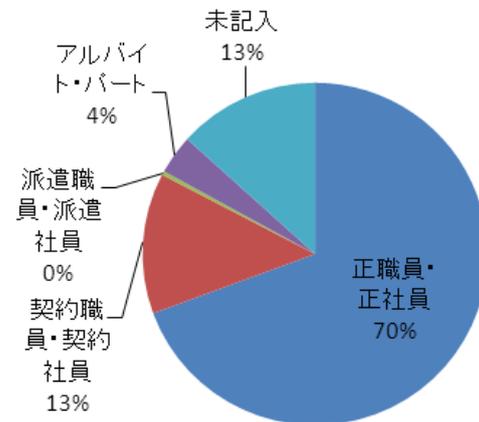


図3:回答者の雇用形態(形態別比率)

**(3) 協力隊参加経験による成長の実感：「成長を実感している隊員が96%」**

Q16. (1)「協力隊参加により成長した・能力が伸びたと感じる」との問いに対しては、全体の96%が「成長した・能力が伸びた」と回答している（表7、図4）。JICA ボランティア事業の目的は「開発途上国の社会・経済発展への寄与、友好親善・相互理解の深化、日本青年の広い国際的視野の涵養および日本社会への還元」である。日本が持つ技術や経験を伝え、役立ててもらうことに大きな意義があり、そしてそれは開発途上国との友好親善及び相互理解の深化にもつながる。また、ボランティアに参加する人にとっても、自分自身を成長させ、真の意味の国際人となる機会でもある。Q16の回答より、事業目的の3つ目として掲げられている「日本青年の人材育成」が達成されたことがうかがえる。

表7:協力隊参加経験による成長の実感

	内訳	人数	%
1	はい	313	96%
2	いいえ	7	2%
3	未記入	5	2%
	合計	325	100%

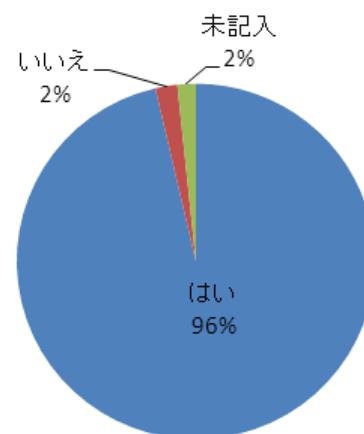


図4:協力隊参加経験による成長の実感(有無の比率)

**(4) 協力隊参加により成長した能力：「協力隊経験によりグローバル人材に求められる柔軟性・異文化理解・語学力・コミュニケーション能力が成長」**

Q16. (2)「協力隊参加により成長した能力をお選びください。(3つまで選択可)」の問いに対する結果は下記のようになった(表8、図5)。回答者はQ16.1)の問いに「はい」と回答した312人である。一番成長した、能力が伸びたと感じられるのが、柔軟性であり、全体の20%を占め、異文化理解(15%)、語学力(12%)、コミュニケーション能力(10%)が続いた。異なる言語や慣れない生活習慣といった壁を越えて、2年間ボランティア活動に従事してきたことで、柔軟性を始め、様々な能力が伸びたと回答する方が多かった。特に柔軟性・語学力・異文化理解は仕事や生活に密着しているため、帰国前と帰国後の差を意識しやすいことがうかがえる。「その他」には、愛国心・忍耐力・広い視野・挫折の経験・教授力・適応力・向学心・度胸・国内外への関心・ものを作る力・人を信頼する力・専門技術が挙げられた。

表8:協力隊参加により成長した能力(3つ以内)

	成長した能力	合計	%
1	柔軟性	181	20%
2	異文化理解	138	15%
3	語学力	115	12%
4	コミュニケーション能力	89	10%
5	実行力	86	9%
6	ストレスコントロール力	65	7%
7	主体性	44	5%
8	協調性	47	5%
9	創造力	33	4%
10	計画力	25	3%
11	使命感	19	2%
12	発信力	20	2%
13	積極性	18	2%
14	責任感	12	1%
15	規律性	7	1%
16	その他	22	2%
17	未記入	0	0%
	合計	921	100%

※回答者:313人(Q16.1)ではいと答えた人のみ

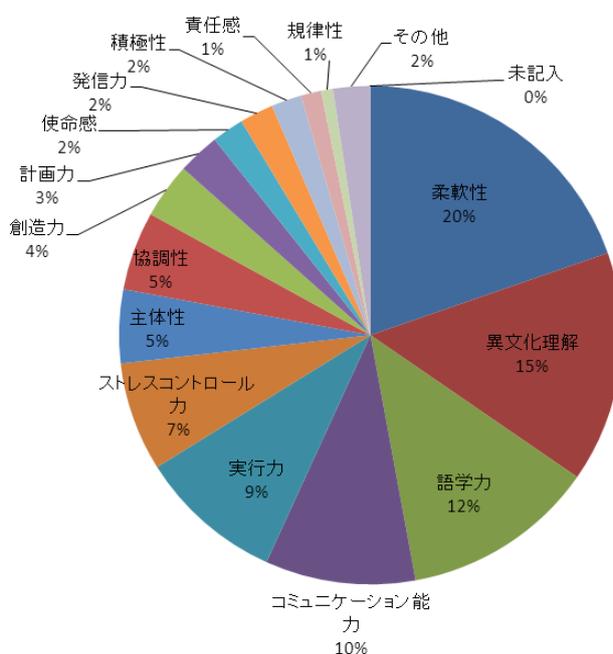


図5:協力隊参加により成長した能力(3つ以内、能力別比率)

Q16. (2)「協力隊参加により成長した能力」と職業の関連性を証明する為に、類似性の高いものを集めてグループを作ることが出来る、クラスター分析<sup>2</sup>（頻度マトリクスに基づくクラスター分析）を導入した。「地方公務員（教員職）」は使命感・積極性・計画力・主体性が、同じグループになっていることから、学校において常に計画性（未来のビジョン）を持ちながら積極的に活動している傾向がうかがえる（図6）。「民間企業」は語学力・コミュニケーション能力・異文化理解の関係性から、経済のグローバル化に対応し語学力を用いながら働く姿勢がうかがえる。またストレスコントロール力と創造力に強い関係性もみえる（図7）。「自営」では語学力・積極性以外の能力が1つのグループになっていることから、総合的な能力が活かされる傾向がうかがえる（図8）。「公益法人」はストレスコントロール力・創造力・積極性・柔軟性に強い関係性がみえており、自分自身が環境に適応すると共に、常に環境改善に取り組みながら働く姿勢がうかがえる（図9）。

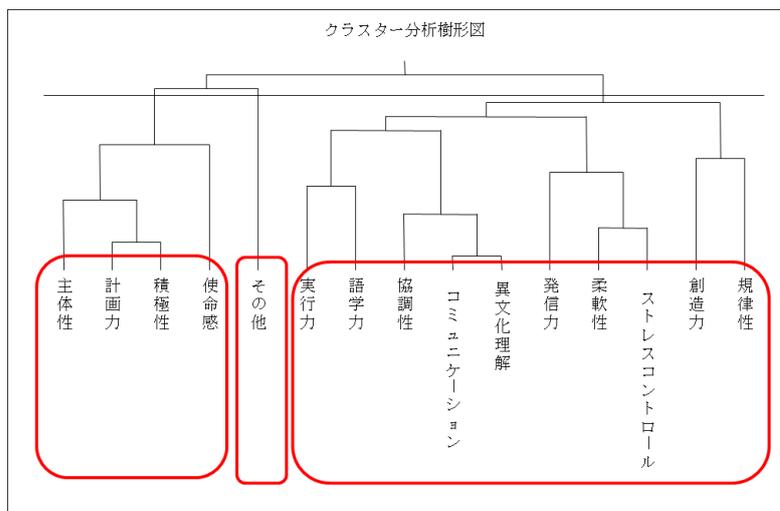


図6：協力隊経験により成長した能力  
—地方公務員（教員職）

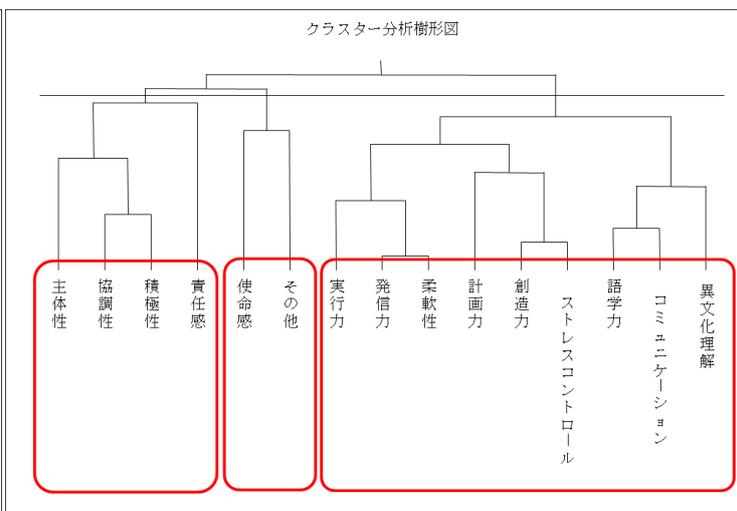


図7：協力隊経験により成長した能力  
—民間企業

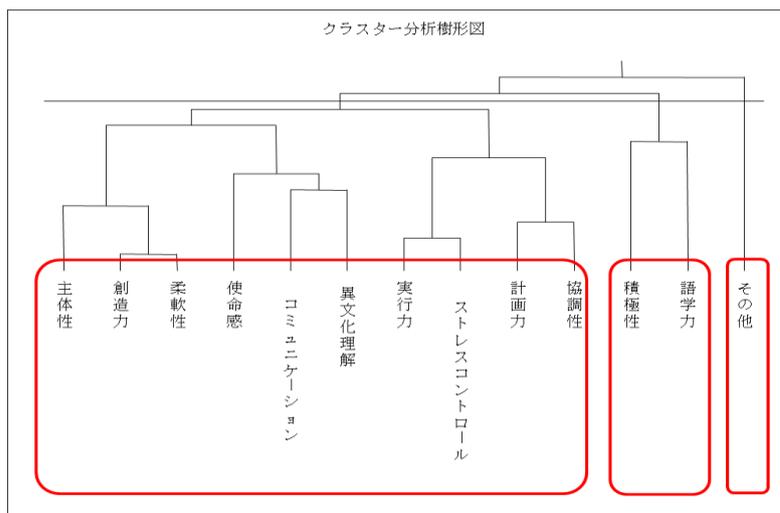


図8：協力隊経験により成長した能力  
—自営

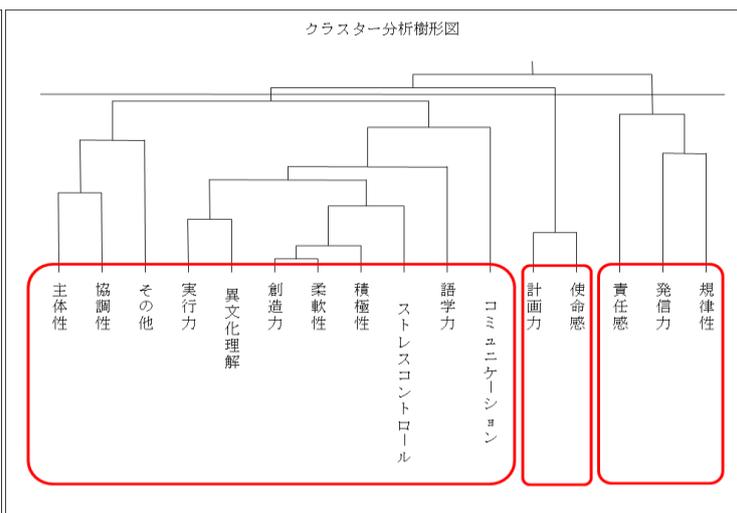


図9：協力隊経験により成長した能力  
—公益法人

<sup>2</sup> 異なる性質のものが混ざり合っている中から、データに基づいて類似性の高いものを集めてグループを作り、分析する手法であり、繋がりの高い能力ほど下で繋がっている。

(5) 協力隊経験が「仕事」「日常生活」に役立つ度合い：「仕事」「日常生活」において役立っていると感じる隊員が80%以上

Q16. (3) 「上記で伸びたと感じる能力や協力隊経験が、現在の「仕事」において役立っていると思いますか。」という問いに対しては、全体の81%が「とても役立っている」又は「まあまあ役立っている」と回答した。「あまり」又は「全然役立っていない」と答えた方は6%と少数であった(表9、図10)。

表9: 協力隊経験が現在の「仕事」に役立つ度合

	内訳	合計	%
1	とても役立っている	135	44%
2	まあまあ役立っている	117	37%
3	どちらともいえない	25	8%
4	あまり役立っていない	15	4%
5	全然役立っていない	4	1%
6	未記入	17	6%
	合計	313	100%

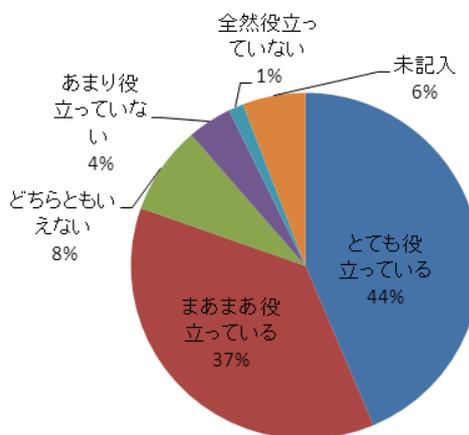


図10: 協力隊経験が現在の「仕事」に役立つ度合(比率)

Q16. (4) 「上記で伸びたと感じる能力や協力隊経験が、現在の「日常生活」において役立っていると思いますか。」という問いに対しては、全体の80%が「とても役立っている」又は「まあまあ役立っている」と回答されている(表10、図11)。「どちらともいえない」と回答した人が、Q16.3)の「協力隊経験が仕事において役立っているか」に比べ多かった要因としては、日常生活において語学を始めとする他能力を発揮する機会が少ないと推測される。しかし、子育てや家族、地域社会のコミュニケーションにおいて、「役立っている」と答えた方が数多くいた。

表10: 協力隊経験が「日常生活」に役立つ度合

	内訳	合計	%
1	とても役立っている	112	36%
2	まあまあ役立っている	137	44%
3	どちらともいえない	46	15%
4	あまり役立っていない	14	4%
5	全然役立っていない	1	0%
6	未記入	3	1%
	合計	313	100%

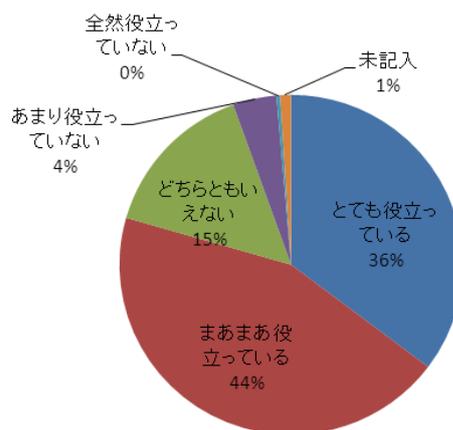


図11: 協力隊経験が「日常生活」に役立つ度合(比率)

## (6) 協力隊経験が役立っている具体的エピソード：多様な機会や場における活用

Q16. (5)「協力隊経験が役立っている具体的エピソードをお書きください」では、数多くのエピソードを聞くことが出来た為、エピソードは「仕事において」・「生活において」・「ボランティア活動において」・「育児において」の4つに分類した。200件を超えるエピソードを収集できたが、分野ごとでは、「仕事と生活において」の回答が各100回答程度あり、「ボランティア活動において」(9回答)、「育児において」(7回答)と続いた。エピソードから職種や活動に関係なく、協力隊経験が帰国後の様々な機会・場において非常に役立っていることがうかがえる。詳細は下記参照(表11)。

表 11: 協力隊経験が役に立ったエピソード

分類項目	具体例
仕事において (105 回答)	<p><b>【1】職場(学校)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>□授業に役立った。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・学校で異文化教育担当するようになった。</li> <li>・異文化を紹介するだけでなく、異文化を理解していこうという授業ができるようになった。</li> <li>・社会科を教える際に海外事情を説明し易くなった。</li> <li>・全て英語で授業を行う All English の模範授業を行った。</li> </ul> </li> <li>□生徒指導において役立った。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・異文化理解が深まったため、国籍の子供や保護者の対応に役立った。</li> <li>・柔軟性は児童理解に、対応力は生徒指導に役立った。</li> </ul> </li> <li>□学校業務において役立った。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・協力隊時代の活動計画の作成・モニタリングは指導計画の作成等で役立った。</li> <li>・コミュニケーション能力が付き、他職種・他機関との連携がとり易くなった。</li> <li>・学校教育は企画能力が必要な為、協力隊活動と共通する部分も多く、経験が役立っている。</li> <li>・自分の気持ち・言葉を伝えることに苦労した経験から、相手の気持ちをよく理解しようとするようになった。</li> <li>・何事も自分に置き換えて考えるようになった。</li> <li>・任国では子供の育つ環境・教育が違う為、今の日本の子供たちに欠けている物が分かるようになった。</li> <li>・ALT (Assistant Language Teacher・外国語指導助手) との交流を負担に感じない。</li> </ul> </li> </ul> <p><b>【2】職場(学校以外)</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>□語学力がついた。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・職場に英語の電話やメールがきても対応できる。</li> <li>・外国人顧客・研修生の接客・対応を任せられるようになった。</li> <li>・海外出張・海外案件が増えた</li> </ul> </li> <li>□コミュニケーション能力がついた。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・海外勤務において現地スタッフと、日本人スタッフの調整を行える。</li> <li>・職場での人間関係が苦にならない。</li> <li>・任国では言葉や文化が違ったため、相手の意見を聞く姿勢が身についた。(8割認めて2割の主張等)</li> <li>・臨機応変に対応。</li> <li>・相手が求められるサービスが分かる。</li> </ul> </li> <li>□異文化理解が深まった。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・相手の置かれている立場や状況を理解しようとする姿勢が身についた。(柔軟性がついた)</li> <li>・自国の文化が当たり前でないという感覚がついた。</li> <li>・日本を客観視できるようになった。</li> </ul> </li> <li>□現在も協力隊時代の職種と同じ仕事に携わっている為、協力隊経験がそのまま役立っている。</li> <li>□組織マネジメント、企業、イベント開催時に、協力隊の企画・計画・提案・実施の経験が役立った。</li> <li>□ボランティア調整員の仕事の際、自身の経験からボランティアの気持ちを理解できた。</li> <li>□指導において、忍耐力を持って指導できるようになった。</li> <li>□自分のやるべきことは地道に種をまき、苗を育てることだと思い仕事をするようになった。</li> <li>□予算管理能力が向上した。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・予算やものが不足していても、あるもので代用できる。</li> <li>・必要なものを低予算で解決する工夫が身についた。</li> </ul> </li> <li>□協力隊経験・海外でのキャリアが認められ、ライセンスを取得できた。</li> </ul> <p><b>【3】就職活動</b></p> <ul style="list-style-type: none"> <li>□就職活動の際に、協力隊経験が買われた。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・協力隊経験のある日本語教師として就職が有利になった。</li> <li>・海外での経験が評価され、海外案件担当になった。</li> <li>・海外経験が評価され、外資系会社やコンサルタント会社に就職できた。</li> </ul> </li> </ul>

分類項目	具体例
仕事において (続き)	<ul style="list-style-type: none"> <li>□現地で得た人間関係が帰国後の進路につながった。</li> <li>□協力隊枠で採用試験に合格した。</li> <li>□転職のきっかけとなった <ul style="list-style-type: none"> <li>・貧困が生む問題の一つに医療格差があることを実感し、医療職へ転職した。</li> </ul> </li> </ul>
生活において (118 回答)	<ul style="list-style-type: none"> <li>□国際理解が深まった。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・体験談を友人や学校で話すことで、周囲の人の国際理解が深まった。</li> <li>・相手の状況に理解を示したうえで、課題の解決策を提示できるようになった。</li> <li>・日本のやり方がすべて正しいのではなく、相手の国の状況や、考え方、文化に合わせた協力が必要だと考えられるようになった。) <ul style="list-style-type: none"> <li>・国・人種に対する先入観・偏見がなくなり、個人として接するようになった。</li> <li>・海外の方や異文化への理解が深まった(一方で、日本人の細かい言動に悩まされた)。</li> <li>・初めて出会う人に信頼を得られるまで、待つことができるようになった。</li> <li>・国籍や人種による差別・いじめについてじっくり考えるようになった。</li> <li>・困っている外国人に声をかけられるようになった(地元在住の外国人にゴミの分別方法を教えた。)</li> <li>・在日外国人に対する理解が深まった。</li> <li>・外国人や海外情勢が身近なものとなった。</li> <li>・支援方法や国際協力の現場の状況が理解しやすくなった。</li> </ul> </li> </ul> </li> <li>□コミュニケーション能力が向上した。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・相手の立場を考えたコミュニケーションスキルが身についた。</li> <li>・周囲の人々と積極的に付き合えるようになった。</li> <li>・協力隊経験を話すことによって、知人、仲間が増えた。</li> <li>・自分とは考えが違う相手がなぜそう考えるのか、背景まで含めて考えるようになった。</li> <li>・OV・OB 会ネットワークで、交友関係が広まった。</li> <li>・価値観が異なる相手とのコミュニケーションもストレスを感じなくなった。</li> <li>・回答が遅かったとしても、辛抱強く待てるようになった。</li> <li>・相手が自分にしてくれないことに対して、期待しすぎなくなった。</li> <li>・田舎の生活も異文化社会と変わらないので理不尽なことがあっても不満に思わない。</li> <li>・上手く活動できない中で、相手の立場や主張を聞き入れる習慣がついた。</li> <li>・どのようにアプローチすると自分の思いを相手が受け入れやすいか、考えられるようになった。</li> </ul> </li> <li>□旅行などで語学が役立った。</li> <li>□節電・節水意識が高まった。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・旅行先や地震後の計画停電でも他の人より対応に困らなかつた。</li> <li>・任国では飲み水が貴重な為、帰国後も水を大切に思うようになった。</li> </ul> </li> <li>□物がなくても発想の転換で対応できるようになった。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・あるもので間に合わせる。ないから出来ないでという意識はなくなった。</li> </ul> </li> <li>□価値観が変わった。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・視野が広がり、物ことを包括的に見られるようになった。</li> <li>・些細なことで動じなくなった。</li> <li>・難しい問題に対しても楽しみながら対応することができる。</li> <li>・異文化圏に単身で派遣され、どのような課題があっても自分の力で解決していく経験を通じて、自立した人間に近付けた。</li> <li>・物質的豊かさより人と助け合う精神的な豊かさの大切さが分かった。</li> <li>・チャレンジ精神がついた。</li> <li>・楽観視・ポジティブ思考になった。</li> <li>・自国の文化を客観視できるようになった。</li> <li>・「途上国で頑張れたから、大丈夫」という根拠のない自信が身に付いた。</li> <li>・自分で考え行動する力がついた。</li> <li>・仕方ないことを仕方ないと受け入れることも必要であることを学んだ。</li> <li>・相手を許容できる範囲が広がった。</li> <li>・任国で職種とまったく違う活動を要求されたことで、対応力がついた。</li> <li>・他人に助けを求められるようになった。</li> <li>・忍耐強くなった。</li> <li>・限られた条件の中で、最大限の効果を発揮する為に、様々な工夫を自ら考え実行する力がついた。</li> </ul> </li> <li>□自己学習のきっかけとなった(手話の勉強)。</li> </ul>
ボランティア活動において (9 回答)	<ul style="list-style-type: none"> <li>□語学が役に立った。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・留学生の対応やホームステイの受け入れ時に語学が役立った。</li> <li>・現在海外在住の為、語学を活用する機会が多い。</li> </ul> </li> <li>□人脈が広がった。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・NGO と繋がりが出来た為、チリの災害支援に参加することができた。</li> <li>・隊員との繋がりが地域活動への積極的な関与に結びついている。</li> </ul> </li> </ul>

分類項目	具体例
ボランティア活動において (続き)	<ul style="list-style-type: none"> <li>□経験が認められて、緊急援助活動に参加することになった。</li> <li>・必ずしも恵まれない医療環境下での医療遂行能力を評価され、DMAT に選ばれた。</li> <li>・JDR に登録できた。</li> <li>□地域住民の自助努力が重要であるとわかったので、地域参加を積極的にするようになった。</li> </ul>
育児において (7 回答)	<ul style="list-style-type: none"> <li>□コミュニケーション能力がついた。</li> <li>・外国籍の親との交流や、他関係者とのコミュニケーションが上手くなった。</li> <li>□忍耐力がついた。</li> <li>・今よりも将来を見据えて考え行動ができる。</li> <li>・育児・人間関係に関して思いやりを持って根気強く対応できる。</li> <li>□子供に対して柔軟に対応できるようになった。</li> <li>□子供の自立や自主性を育てることを大切にするようになった。</li> <li>□育児への考え方も、他の国の子育てを見てきた為、柔軟にとらえられるようになった。</li> </ul>

(7) 協力隊経験の活用：地域社会、国際交流・異文化理解、国際協力、自己研鑽・キャリアアップ、  
などにおける活用事例（複数回答可・現在過去問わず）

－協力隊経験の活用事例①：地域社会で自治会活動、子育て支援、福祉・慈善活動、環境保護に関わる人が多い。

Q17. (1) の「地域社会において」の問いに対しては下記のような結果となった（表 12）。その他の活動には OB 会活動、国際関係のイベントの手伝い、自分の子供が所属している保育園での活動、生活の見直し、竹林活動、震災ボランティア、美術館でのボランティア、防災学習ツアー、陸上自衛隊予備訓練、日本文化紹介等が挙げられ、積極的に地域社会の活動に関与する姿勢がうかがえる。

表 12: 協力隊経験の活用(地域社会)

	内訳	合計	%
①	自治会活動、子育て支援、福祉活動、慈善活動、環境保護	96	49%
②	子どもや青少年のキャンプ、レクレーション、自然学校など野外教育活動	46	24%
③	地域・村おこし(観光、産業等)の活動	31	15%
④	その他	23	11%
	合計	196	100%

－協力隊経験の活用事例②：体験談発表を通じ、国際理解教育に貢献。

Q17. (2) の「国際交流・異文化理解」の問いに対しては下記のような結果となった（表 13）。国際交流・異文化理解の活動は、他地域社会や国際協力、自己研鑽に比べ 3 倍以上の回答があったことから、活動しやすい分野・興味の高い分野ということが推測される。その中でも一番多い活動が協力隊経験を話すことであり、国際理解教育に積極的に取り組み次世代を担う子供たちの国際的な視野の涵養に貢献していることがうかがえる。その他の活動には、海外での仕事、当時のカウンターパートと共同発表、大学で日本文化コースを担当、出前講座、通訳が挙げられた。

表 13: 協力隊経験の活用(国際交流・異文化理解)

	内訳	合計	%
①	協力隊体験談を話している	213	29%
②	任国での活動を通じて知り合った人達と今でも連絡をとる	195	27%
③	地元や近隣地域でおこなわれる交流イベントや催し物等に参加	109	15%
④	在日外国人に対する通訳、語学指導、生活相談支援	73	10%
⑤	任国で身に付けた現地の生活習慣・文化を帰国後も続けている	68	9%
⑥	インターネットを通して、新たに外国人との交友関係を広めている	62	8%
⑦	その他	16	2%
	合計	736	100%

－協力隊経験の活用事例③：帰国後も多くの隊員が国際協力に携わっている。

Q17. (3) の「国際協力」という問いに対しては下記のような結果となった(表 14)。帰国後も NPO や NGO、コンサルタントだけでなく、個人単位でも多くの隊員が国際協力に関わっていることがわかる。その他の活動には、JICA 短期ボランティア・シニアボランティア・専門家として活動、メディアで協力隊を紹介、フェアトレード、通訳、JOCA の職種別応募相談員が挙げられた。

表 14: 協力隊経験の活用(国際協力)

	内訳	合計	%
①	NGO、NPO、開発コンサルタントに仕事や会員として携わっている	93	60%
②	個人単位で任国またはそれ以外の途上国への支援活動	50	32%
③	その他	13	8%
	合計	156	100%

－協力隊経験の活用事例④：帰国後も語学力や専門知識のスキルアップに強い関心あり。

Q17. (4) の「自己研鑽・キャリアアップにおいて」という問いに対しては下記のような結果となった(表 15)。語学や専門知識のスキルアップに関心があり、隊員の自己研鑽の意識の高さがうかがえる。その他の活動には、教員・在外健康管理員・ヨガインストラクター等を目指す、免許取得、大学院進学が挙げられた。

表 15: 協力隊経験の活用(自己研鑽・キャリアアップ)

	内訳	合計	%
①	任国の言語や外国語の学習を続け仕事や生活の場で活用	114	39%
②	派遣職種の専門性を現在の職業に活かしている	107	36%
③	派遣職種以外の専門性を身につけ、現在の職業に活かしている	63	22%
④	その他	8	3%
	合計	292	100%

－協力隊経験の活用事例⑤：上記以外の活動

Q17. (5) の「その他」という問いに対しては、26 件の自由記述があり、OV 会活動、通訳や研修に協力、友人にフェアトレードを広める、フェアトレード商品を積極的に購入、大学で講師を務める、イベントを主催、災害義援金に寄付、個人的に林業美化再生運動を行う、大学の柔道部の合宿の手伝い、台湾の文化団体との交流、関東教育ネットワークの立ち上げ、県民会議に参加、医療チーム派遣プロジェクトに参加、協力隊募集時期に母校にポスターを貼る等の宣伝活動、職種別応募相談サービスの相談

員（（公社）青年海外協力協会が実施している、協力隊経験者がインターネットを通して質問に答えるサービス）等が挙げられた。

**(8) 今後協力隊経験を活かして取り組みたい活動：国際協力、国際理解、仕事、学問、その他における活動の展開**

Q18. (1) 「今後協力隊経験を活かして取り組みたい活動」は、国際協力・国際理解・仕事・学問・その他の5つに分類した。詳細は下記参照（表16）。

**表 16: 今後、協力隊経験を活かして取り組みたい活動(具体例)(自由記述)**

分類項目	具体例
<b>国際協力において</b> <b>(67 回答)</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>□開発途上国・任国への援助(物資・資金・技術的援助)</li> <li>□NGO・NPO 活動。</li> <li>□再度 JICA ボランティアに参加(シニアボランティア・短期派遣ボランティアとして再度参加したい)。</li> <li>□自然災害ボランティア。</li> <li>□医療活動。</li> <li>□森林・植林活動。</li> <li>□環境教育。</li> <li>□知的財産にかかる関わるサポート。</li> <li>□専門性を活かした技術的指導。</li> <li>□ホームステイの受け入れ先となる。</li> <li>□日本へ還元されるような国際協力に携わりたい。</li> <li>□任国の観光開発・日本人誘致。</li> <li>□ICA ボランティアが存続できるような活動。</li> <li>□JICA ボランティア応募者へのサポート。</li> <li>□赴任中のボランティアの支援。</li> </ul>
<b>国際理解・国際交流において</b> <b>(67 回答)</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>□国際理解教育に携わりたい。</li> <li>・体験談発表・出前講座。</li> <li>・大学生へのワークショップ。</li> <li>・学校で、子供たちが途上国の現状や自分たちに出来ることを考える活動に取り組んでいきたい。</li> <li>・居住区が田舎な為、子供が異文化を体験できるようなイベントを企画したい。</li> <li>・国際協力に興味を持つ生徒へのアドバイスをやりたい。</li> <li>・看護学校で国際看護について話をしたい。</li> <li>・任国紹介</li> <li>・開発途上国に行って活動する以外にも、色々な形のボランティア活動があることを伝えていきたい。</li> <li>□任国に関するイベントの企画運営・補助。</li> <li>□帰国隊員同士の情報交換。</li> <li>□地域のコミュニティづくり</li> <li>□多文化共生社会実現の地域での担い手となる。</li> <li>□子育て中や子育て経験者のネットワーク作りをする。</li> <li>□ニュースで JICA ボランティアの活動を紹介する。</li> <li>□文化交流(日本文化を学ぶ。日本文化・日本語紹介)。</li> <li>□通訳・ガイド等のボランティア活動。</li> <li>□OB 会活動に参加する。</li> <li>□在日外国人支援 (橋渡しの役割を担う、交流会の企画、通訳、生活支援、国際結婚へのアドバイス、住みやすい街づくり等)</li> </ul>
<b>仕事において</b> <b>(35 回答)</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>□協力隊経験を活かした仕事を行う。</li> <li>□農業・酪農に携わり、途上国の技術者を呼んで研修事業を行いたい。</li> <li>□NGO・NPO の設立・活動。</li> <li>□専門家として活動(企画調査員・開発コンサルタント)。</li> <li>□海外で仕事をしたい。</li> <li>□フェアトレード。</li> <li>□執筆活動。</li> <li>□人材育成に関わりたい(会社でのグローバル人材育成)。</li> <li>□自然学校の設立。</li> <li>□体験型の旅行ツアーの企画。</li> <li>□貿易(ビジネスを通じて途上国と関わりを持っていきたい、三国間貿易)。</li> </ul>

分類項目	具体例
学問において (続き)	<input type="checkbox"/> 医療施設建設事業に取り組みたい。 <input type="checkbox"/> 医療通訳。 <input type="checkbox"/> 国際協力団体の組織強化・収益事業。 <input type="checkbox"/> 所属先団体で国際技術協力の導入。 <input type="checkbox"/> 学校の外国人児童の日本語教育。 <input type="checkbox"/> 論文作成・発表(環境破壊問題・日本語教育・保育分野等)。 <input type="checkbox"/> 語学の再学習(スキルアップ)。
その他 (38 回答)	<input type="checkbox"/> 地域活性化、村おこし ・日本国内の地域づくりにも、協力隊での地域づくりの経験を活かしたい。 ・サークル活動。日本の原風景を取り戻す活動。 <input type="checkbox"/> 農業 ・耕作放棄地を外国人に活用してもらおう。 <input type="checkbox"/> 子育て ・子供が広い世界観をもって成長できるようま教育をしたい。 ・子育てサークルの設立。 <input type="checkbox"/> 帰国隊員の再就職支援。 <input type="checkbox"/> 政治安定に向けた市民の政治参加促進・政治家との交流活動・討論会 <input type="checkbox"/> 環境活動、地球にやさしい活動。 <input type="checkbox"/> 反原発・自然エネルギーへのシフトする声明を出したい。 <input type="checkbox"/> 中国残留孤児の方々にかかわる活動。 <input type="checkbox"/> 要望や実情などを共有できる仕組み作り(適材適所)。 <input type="checkbox"/> 持続可能にかつ人間らしく生きる方法の情報発信をしていきたい。

**(9) 必要とされるサポート体制：協力隊員による社会還元活動にむけた情報提供。**

Q18. (2) 「どのようなサポートがあれば活動しやすいですか」という問いでは情報提供が一番多く、その内容は、ボランティアの募集情報や支援・サポート体制の情報、帰国隊員の情報であり、いずれも積極的に情報を得ることで社会還元・社会貢献に積極的に携わっていきたいという意図をうかがうことができる(表 17)。また、東日本大震災の影響で、国内の災害救援への関心が高まり、活動の為の情報提供やコーディネートの必要性が求められていた。

表 17: 必要とされるサポート体制(具体例)(自由記述)

分類項目	具体例
情報提供 (43 回答)	<input type="checkbox"/> ボランティア募集情報。 ・災害ボランティア。 ・休日を利用できるボランティア活動。 <input type="checkbox"/> イベント開催情報。 <input type="checkbox"/> 支援・サポート体制の情報。 <input type="checkbox"/> メールリストやフェイスブック等を利用した情報発信。 <input type="checkbox"/> NGO・NPO の情報。 <input type="checkbox"/> 任国の現状(社会状況、現地の詳細)。 <input type="checkbox"/> JICA ボランティア事業の現状。 ・派遣人数・要請内容等、現在は(公社)青年海外協力協会(JOCA)の“かわら版”で情報を得ている。 <input type="checkbox"/> OV の活動事例紹介。 ・小学校英語と協力隊経験を結びつけているような活動を知りたい。 <input type="checkbox"/> 海外でのキャリアアップ情報。 <input type="checkbox"/> ポータルシステムの設置。
資金・物資の支援 (17 回答)	<input type="checkbox"/> 活動資金の支援。 <input type="checkbox"/> 会場の貸し出し(地球ひろばのような施設が小規模でも地方にあると活動しやすい)。 <input type="checkbox"/> ワークショップ・イベント用の備品貸し出し(文房具、写真、教材等)。 <input type="checkbox"/> JICA・JOCA のサポーター制度。 <input type="checkbox"/> 現地の方をゲストティーチャーとして派遣。 <input type="checkbox"/> 植林 OB 会の設立。
技術的支援 (5 回答)	<input type="checkbox"/> 専門家からの助言。 <input type="checkbox"/> テクニカルサポート。
交流事業・ネットワーク (17 回答)	<input type="checkbox"/> 国別・職種別の OB 会作り <input type="checkbox"/> ソーシャルネットワーク窓口の設置。 <input type="checkbox"/> 活動中の JOCV を活用し、海外の人・生徒間との交流活動の仲介して欲しい。

分類項目	具体例
交流事業・ネットワーク (続き)	<ul style="list-style-type: none"> <li>□ メーリングリストやフェイスブック等での活動の広報・告知。</li> <li>□ 異文化交流会(例:派遣職種関係の研修で来日している外国人、任国の研修員との交流会)。</li> <li>□ 現地 JICA 事務所との仲介。</li> <li>□ 同窓会(日本での活動のコネクション作りの為)。</li> <li>□ 政治家の方々との討論会の提供。</li> </ul>
広報 (11 回答)	<ul style="list-style-type: none"> <li>□ ウェブサイトの更なる充実。</li> <li>□ イメージアップの為の広報活動 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 仕分けで税金の無駄遣いといった所ばかりクローズアップされている為。</li> <li>・ 日本が協力隊事業の国際協力事業を通して、如何に良好な対外関係を構築し、日本の国際社会での地位向上に成果をあげているかを伝えて欲しい。</li> </ul> </li> <li>□ JICA ボランティアの活動のイメージを井戸掘りから変わるものにして欲しい。</li> <li>□ 帰国後の隊員が企業・社会でどのように貢献しているかメディアで紹介。</li> <li>□ 現職参加制度促進の為、教育機関への広報活動。</li> <li>□ ボランティアに対する理解が深まるような広報活動。</li> <li>□ 帰国後の進路状況は厳しいものであることもきちんと伝えるべき。</li> </ul>
ボランティア活動 (9 回答)	<ul style="list-style-type: none"> <li>□ 社会還元活動に参加できる機会の提供。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・ ボランティア経験を話す場の提供</li> <li>・ 国内の災害派遣制度の充実。</li> </ul> </li> <li>□ ボランティア斡旋サポート。</li> </ul>
進路支援 (9 回答)	<ul style="list-style-type: none"> <li>□ 求人情報の紹介。</li> <li>□ スキルアップ講座の開催(語学、国際理解、起業・NPO 設立等に関する各種セミナー)。</li> <li>□ キャリアコンサルティング。</li> </ul>
青年海外協力隊の制度について (7 回答)	<ul style="list-style-type: none"> <li>□ 現職派遣制度の更なる充実。</li> <li>□ 会社の休暇で参加出来るような短期派遣の充実。</li> <li>□ 組織が JICA ボランティアに対する理解が深まり、現職参加制度を推進するような働きかけ。</li> <li>□ 横浜市と JICA 連携協定の内容の具体化。</li> <li>□ JICA ボランティア活動、国際協力活動を市の業務として位置付けるよう活動。</li> </ul>
その他 (19 回答)	<ul style="list-style-type: none"> <li>□ 今後も JICA ボランティア事業を継続して欲しい。</li> <li>□ 託児サービス(幼児がいるため活動に参加しにくい為)。</li> <li>□ JICA ボランティアへの理解を深める (都道府県により、国際交流・開発事業が積極的、非積極的に二分される為)</li> <li>□ 協力隊道場を行いたい。</li> <li>□ 相談窓口の設置(速やかな対応、すぐ取れる環境が必要な為)。</li> <li>□ 現地取材のコーディネート。</li> <li>□ JICA が原発に対してどういう立場なのかを明らかにして国に働きかけて欲しい。</li> </ul>

必要とされているサポート体制は上述の通りであるが、既に JICA ボランティアウェブサイトを通じて情報公開がされているにも関わらず、知らないが為に大多数が活用できていない実態が浮き彫りになる。実際ウェブサイトを確認可能なサポート体制は下記表参照(表 18)。

表 18: 情報提供に関するサポート体制の現状

求められているサポート	現在の JICA のサポート体制
進路支援	● 進路開拓セミナー・進路相談カウンセラー・進路情報の提供・各種待遇措置(教育・自治体職員採用試験・大学単位認定・大学院入学優遇制度)
スキルアップ	● キャリアセミナー・勉強会
帰国後の活動事例集	● HP にて公開(経験者の声)
国内ボランティア募集情報	● 国際協力キャリア総合情報サイト(PARTNER)にて公開
イベント開催情報	● HP にて公開(OB・OG 関連のお知らせ)
資金	● 教育訓練手当・NGO 活動支援制度
物品・会場の貸し出し	●
活動中の青年海外協力隊との交流	● HP にて派遣中の青年海外協力隊の活動公開(World reporter)
SNS を利用した情報発信	●
現職派遣制度	● 現職教員特別派遣制度・人件費補てん
相談窓口の設置	● 進路カウンセラー

## 6.考察

青年海外協力隊をはじめとする JICA ボランティア事業の目的は「開発途上国の経済・社会の発展、復興への寄与」、「友好親善・相互理解の深化」、「国際的視野の涵養とボランティア経験の社会還元」である。今般、協力隊参加後 10 年が経過した方々を対象に「青年海外協力隊帰国後進路状況・社会還元活動調査」のアンケートを実施した所、回答者の内 96%が協力隊経験により成長を感じていた。特に柔軟性・異文化理解・語学力・コミュニケーション能力の成長を上げる方が顕著であった。また、8 割を超える方々が「協力隊経験が帰国後の仕事や日常生活に役立っている」と感じており、語学力向上により職場で英語の電話・メールに対応できるようになった。コミュニケーション能力向上により職場や私生活・子育てに置いて、柔軟且つ臨機応変に対応できるようになった等、協力隊経験が現在の仕事や日常生活に役立っているエピソードを 200 件以上収集することが出来た。協力隊経験を活かした社会還元活動では、体験談発表を通じた国際理解教育が一番多く、その他にも自治会活動、子育て支援、福祉・慈善活動、環境保護、国際協力活動等が挙げられ、社会還元活動に積極的に関与していることが分かる。また、本調査と並行して、派遣時期を限定せずに帰国隊員の具体的な社会還元事例を日本国内外から 70 件収集したが、その中でも様々な地域・活動において、協力隊経験が活かされていることが明らかになった（別添参照）。

近年では、JICA ボランティアの事業目的の 1 つ「国際的視野の涵養やボランティア経験の社会還元」が注目されており、日本経済団体連合会の「2011 年版経営労働政策委員会報告会」では、経済界でのグローバル人材として、協力隊経験者への期待が説かれている。またグローバル人材の育成・確保の為、現職参加制度や経験者採用を導入する企業や自治体が増えている。グローバル人材の資質として、通常社会人が備えておくべき「社会人基礎力」<sup>3</sup>に加えて、外国語でのコミュニケーション能力、異文化理解・活用力が求められているが、本アンケート結果からも、協力隊経験によりそれらの資質が成長したことが分かり、JICA ボランティア事業がグローバル人材育成の側面を持つことが証明できる。

他方、隊員には、学卒直行の者や企業を退職して参加する者が多く、帰国後の就職が容易でないことが、応募者数が伸びない原因の一つになっているという事実もある。人材育成を長期的に考えた場合、有意義であることは明らかだとしても民間企業、官公庁において 2 年以上職場を離れて協力隊事業に参加させることは、制度上、社会慣行上、極めて困難である。こうした状況を改善するために JICA では「現職参加制度」<sup>4</sup>を整備しているが、依然として退職して協力隊に参加する方が多いことも事実である。今後も現職参加制度促進、帰国後の就職支援の為に JICA ボランティアが企業にとって如何に有力な人材リソースであるかを伝えていくことが必要不可欠である。現在、青年海外協力隊事務局では、企業が求めるグローバル人材としての協力隊の社会的認知度を高める為に、企業向けセミナーや説明会・イベントを多数開催する等、民間企業へのアプローチを積極的に展開している。今後もこのような活動を継続・拡大していく。

アンケートでは、「今後取り組みたい活動」として、開発途上国や派遣国への援助、NGO での活動を

<sup>3</sup> 職場や地域社会の中で多様な人々とともに仕事を行っていく上で必要な基礎的な能力として経済産業省が提唱する概念。「前に踏み出す力」、「考え抜く力」、「チームで働く力」の 3 つの能力、12 の能力要素から構成されている。（12 の能力要素：主体性・実行力・働きかけ力・課題発見力・計画力・創造力・発信力・柔軟性・規律性・傾聴力・状況把握力・ストレスコントロール力）

<sup>4</sup> 現在勤めている人が、退職などの形で所属先や身分を残したまま JICA ボランティアに参加することを指します。（1）**国家公務員**：「国際機関などに派遣される一般職の国家公務員の処遇などに関する法律」または「国家公務員の自己啓発など休業に関する法律」、（2）**地方公務員**：「外国の地方公共団体の機関などに派遣される一般職の地方公務員の処遇などに関する法律」に基づく条例、または「地方公務員法」に基づく「自己啓発など休業」に関する条例、（3）**民間企業**：民間企業が有する退職制度、ボランティア休暇、ボランティア参加のための労使協定や社内規定など

始めとする国際協力、体験談を通じた国際理解教育、国際交流活動、協力隊経験を活かした仕事等が挙げられていたが、その為に情報提供を求める声が多かった。特に東日本大震災の影響で、災害救援に対する関心が高まっており、国内の災害時にボランティアの募集や派遣を行うシステムの必要性が説かれた。今アンケート調査時、帰国隊員の連絡先が入手困難なケースがあったが、そのような事態を防ぐ為にも、定期的な情報発信や経験者のネットワークを活用につながる人材バンクが今後必要となってくる。

以上、今アンケート調査より、協力隊経験が帰国後も仕事や日常生活で役立っており、グローバル人材に必要な資質が成長したこと、協力隊経験を活かし社会還元活動に積極的に関与していることが明らかとなった。そうしたことから、JICA ボランティア事業の目的の1つである「国際的視野の涵養とボランティア経験の社会還元」が達成されたことが証明できる。また、協力隊経験者は日本の地域社会を活性化させ、あるいは企業の国際化を促進させる原動力として、その経験が有益であることが明らかになった。今後はこれらの事実を積極的に発信することにより、青年海外協力隊事業への国民理解の促進、企業の理解促進が進むことに期待を寄せたい。